

「なので」の文頭使用に関する覚え書き

谷部 弘子

1. はじめに

文頭での「なので」の使用が増えている。

- (1) 今週は引っ越しで大変なので、来週にしてくれますか。
- (1)' 今週は引っ越しで大変なんです。なので、来週にしてくれますか。

本来は、(1)のように断定の助動詞「だ」が接続助詞「ので」と結びついて文中に現れる要素が、(1)' のように独立した接続詞として用いられる。話すことばにおいて多く耳にしてきたが、最近では書きことばにおける用例もたびたび目に見る。日本人学生や比較的日本語能力の高い留学生のレポートにも見られるようになった⁽¹⁾が、訂正するのがためらわれるほどに、「なので」の文頭使用は浸透してきているようである。(2)は某出版社のメール通信に見られた例、(3)は「日経ビジネスオンライン」の署名入り記事に見られた例である。

- (2) 見積もり金額を比べて、安価な店に注文することは、いたって普通のことだと思います。[原文、改行] なので、学術書を刊行する場合にその費用について見積もりを複数から出して比較して一番安価などころを選ぶということは当然のことと思われると思います。(2011年8月25日)
- (3) 最後に、ロシアの優れた理科系教育は健在で、ロシアは技術の宝庫であるということ。ただ、その技術を最終製品にする力は日本の方がはるかに優れていると思う。なので、日本企業にとってロシアの基礎技術とその人材は魅力的だ。(2011年6月9日)

本稿では、この「なので」の文頭使用について、「国会会議録検索システム」等を利用し、最近20年の推移を見るとともに、具体的な用例から特徴と

使用の傾向を探ることを目的とする。

2. 「なので」の文頭使用に関する言説

インターネット上で検索をすると、いまも、「なので」の文頭使用について「違和感」を覚えるとして疑問を呈したり、解説を加えたりしている例が少なからず見られる。例えば、「5年ほど前から多用されはじめ、いまでは女性を中心に中年の方にまで広がっている。…（中略）…私には非常に耳障りだが、若者たちには、自然な響きがあるのだろうか」（2005.12）⁽²⁾、「2007年9月30日に「文頭の『なので』」に関する記事を書きました。実はその後、私が思っていた以上にこの「なので」の使い方をする人が多いことに気づきました。〔原文、改行〕例えば、ニュースキャスターの小宮悦子さんも、『…です。なので…』というように番組で話していたので、少なくとも口語については、この『なので』を避けている私などは、むしろ少数派に属するようです」（2008.3）⁽³⁾などの事例観察報告から、「『なので～、〇〇』から文を始める用法って、正しい日本語ですか？」（2011.3）⁽⁴⁾といった使用の適否を問う声などがあげられる。

こうした声に対して、識者からの回答もすでに見られる。読者の支持を集めて一時期話題になった『問題な日本語—どこがおかしい？　何がおかしい？』（大修館書店）でも、「なので」を、文章語としてはまだ定着していないしながらも、「なのに」に統いて接続詞化を進めている語として取り上げている。そして、「なので」が使われるようになった理由として、「ので」と「から」の違いを反映させようとしていることや、「『だから』では、理由をごり押しする感じがするが、『ですから』では、畏まり過ぎるか気取り過ぎる」（北原編2004:45）ことなどをあげている。

また、NHK放送文化研究所のウェブサイトでは「最近気になる放送用語」欄（2008.6）⁽⁵⁾で、読者の質問に答える形で、文頭の「なので」を取り上げている。そこでは、ウェブ上のアンケート結果（1,339人回答）として、10代では約7割が「自分で言うことがある」と回答、もっとも少ない60代以上でも3割近くあり、その一方で、40代以上の回答者では半数以上がこの使

い方には「問題がある」としている、という結果がグラフで示されている。さらに「観察するかぎりでは、『文頭ナノデ』は、『だから』と言ってしまうとややぞんざいだけれども、『ですから』『そのため』ではやや堅苦しすぎる、というような中間的な場面（例えば比較的うちとけた間柄の上司に対してなど）でよく使われているよう」だと述べている。同じNHKのアナウンスルーム「気になることば」（2011. 6）⁽⁶⁾では、「なので」の文頭使用の背景について、「近年、ビジネスの現場では”結論を先に述べる”ことが重視され、若い人は一文一文を短く言い切る傾向がある。すると、必然的に接続詞的なもので文章をつないでいくことになる」と解説している。

その他、標準的、規範的な言葉遣いが期待されるアナウンサーの言葉遣いについて視聴者から寄せられた意見としても取り上げられている。tv asahi アナウンサーズの「日本語研究室」⁽⁷⁾では、「なので」の文頭使用を文法的に誤りとした上で、「なので」を使わずに言い換えるとすればどうなるかと検討し、「したがって」では堅苦しい説明口調に聞こえ、「だから」ではデス・マス体と丁寧さにおいてアンバランス、「ですから・ですので」は丁寧な言い方で違和感はない、としている。

以上のように、文頭使用の「なので」は、少なくとも10年以上にわたって「気になることば」として浮遊し、増殖を続けていると言える。これまでに言われていることをまとめると、使用者としては主に若い人、女性があげられ、使用場面としては、話しことばでも対等な関係のくつろいだ場面というよりビジネス場面等比較的あらたまたった場面があげられている。

3. 文頭の「なので」使用の推移

文頭の「なので」使用の推移を見るに際して、第2節で見た「なので」の使用傾向に即して、以下のデータベースを利用することとした。

<A> 現代日本語研究会編（2011）の自然談話テキストデータ

 「国会会議録検索システム」 <http://kokkai.ndl.go.jp/>

<C> 朝日新聞記事データベース「蔵Ⅱ ビジュアル」

<http://database.asahi.com/library2/>

<A>は、あらたまったく休憩時のくつろいだ場まで職場における複数場面の話しことばを採録したもので、データ採録期間は1993年および1999年から2000年にかけてである。は、かなりあらたまったく位置づけられる国会（本会議および各種委員会）での発言記録、<C>は、新聞・雑誌記事データベースである。<C>は書きことばへの移行が見られるかどうかを確認するために選んだ。<A>はデータの採録期間が限定的であるが、<C>は出現数の経年変化を追うことが可能である。

まず、<A>について見てみると、原因・理由を表す「なので（なんで）」で始まる発話は以下の2例のみであった。例(4)の発話者は40代・女性・編集者で、取引先相手との職場での電話会話に現れたもの、(5)は30代・女性・営業職の社内会議における発話である。

- (4) なので一、ま、いちよーほら、あのー、だいたいちゃんと聞かないで、
雰囲気だけで歌ってしまうとゆう、その癖を直すためにー<笑い>、ち
ゃんと一、音をたどってー、しっかり聞きたいと、思っておりますので、
はい、よろしくお願いいいたします。（発話年：1993年）
- (5) なので一、あの、お近くの方（かた）。（発話年：1999・2000年）

つぎに、の調査結果を述べる。調査対象期間は1991年から2010年までの20年である。「国会会議録検索システム」において「。なので、」という文字列を検索し、文頭の「なので」使用件数と使用した発言者の数を調べてみた。図1は、「なので」の使用の推移を出現件数、発言者数（および女性発言者数内数）ごとに示したものである。

図1に見る通り、1998年以前に使用例は見られなかった。1999年に7件の用例が出現して以降、年によって増減はみられるものの、全体としては増加傾向が明らかである。用例の出現件数の増加に比例し、発話者も増加している。2009年の出現件数が発話者数に対してとくに高かったのは、一人の参考人（男性）の発話に計23例現れたためである。もっとも使用例の多い2010年では、32名の発話者による89の使用例が見られた。発話者32名中13名（40.6%）が女性発話者である。発話者は議員だけでなく参考人、公述人が

含まれるが、2011年現在衆参合わせて721名の議員中女性議員は96名（13.3%）であることから考えると、女性発話者の比率は比較的高いと言えよう。

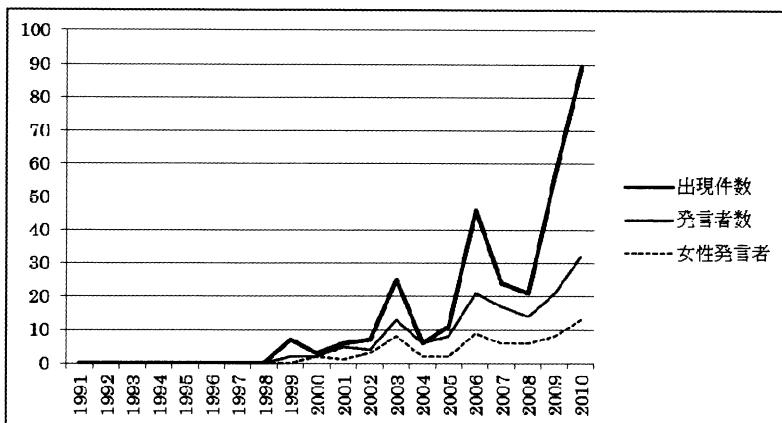


図1：国会会議録にみる文頭の「なので」使用の推移

最後に、<C>における用例検索の結果を述べる。<C>は、「朝日新聞」だけでなく雑誌『週刊朝日』『アエラ』の記事も含まれるが、今回は、「朝日新聞」（本社版、地方版含む）と雑誌とに分けて検索を行なった。図2は、1991年から2010年までの出現件数の推移を示したものである。

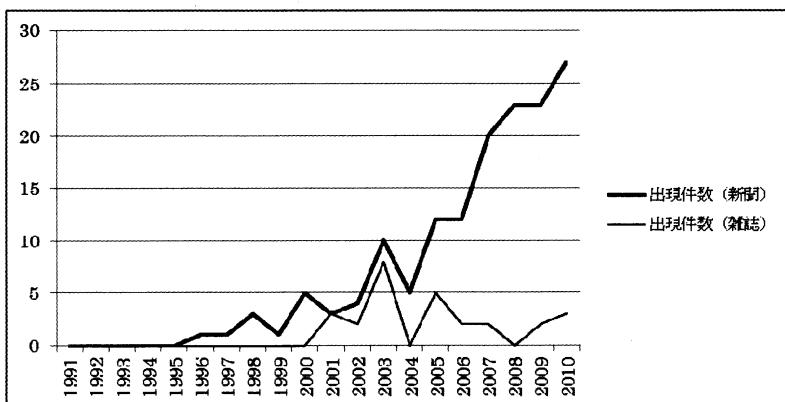


図2：朝日新聞記事データベースにみる文頭の「なので」使用の推移

最初に現れたのは、より早く1996年である。新聞の推移の曲線は2007年以降の上昇が際立っており、今後の増加傾向がみてとれる。新聞記事には政治・経済・社会などの一般的な報道記事のほかに記者の署名入り記事や投稿・対談・インタビュー記事等、書き手あるいは話し手が特定できる記事がある。<C>に見られた文頭の「なので」は、対談・インタビューなど話すことばの引用文の用例が約4分の1を占めるが、そのほかに特定の書き手によるコラム、一般読者による意見文、書き手である取材記者名入りの記事などに見られる。一般的な報道記事に使用例が見られず、特定の個人の使用に限定されているという点では、書きことばにおける文頭の「なので」使用はまだ規範を逸脱した用法にとどまるという位置づけができるだろう。しかし、限定的とはいえ、比較的あらたまつた手紙や投書、普通体（非デスマス体）の記事などにもその使用例が見られる、という点では、今後の書きことばへの進出が強まることが予想される。

以下の例(6)は製薬会社員が紹介する医者からのファックス文中に現れた使用例、例(7)(8)は記者による普通体の記事中に現れた用例である。

- (6) 「家族での欧州生活には、まったく足りませんが、私の場合、大学からわずかばかりの給料がでます。なので、そう多くの金額は望みませんが、出発が三ヶ月後に近づいております」(1996年8月7日 夕刊「知らない医者からおねだり 製薬会社一般職 29歳（会社のフシギ）」)
- (7) 大学の研究室で、マールコートを塗った板と、塗っていない板とをそれぞれ、電球で5時間加熱したところ、板の表面で約2.5度の差が出たという。なので、断熱効果は折り紙付きだ。(2008年8月27日 朝刊「（モノ考 福島のそこ力）「白土」使った塗装剤 内装に生かす断熱効果／福島県」)
- (8) 慣れないいうちは食材を買いすぎがち。なので、朝食はパンなどの主食だけ用意しておく。(2009年6月24日 朝刊「（あなたの安心）親子でキャンプ：5 料理は試行錯誤して楽しく」)

原因・理由を表す接続表現としては、普通体の場合「それで・だから・そのため・したがって・その結果」などがあげられるが、前二者は話しこそばでの使用が一般的であり、後二者は論理的、科学的な思考を述べる際によく用いられ、(8)のような日常的なことがらの叙述にはそぐわない面がある。

なお、新聞よりも多いと思われた雑誌の出現件数は計27にとどまった。

4. 発話者別使用例の特徴と傾向

本節では、に現れた用例について、個々の言語使用者によるバリエーションの使い分けという観点から見てみたい。各年の発話者数は図1に示した通りであるが、同一人物が複数年にわたって出現する場合もあるため、異なり数で見ると発話者は105名となる。以下の表1は、比較的使用例数の多かった発話者ごとに使用例数を示したものである。取り上げた発話者8名中5名までが参考人・公述人として発言している。参考人・公述人の発言が立場上、議員同士の発言より丁寧度が高くなるであろうことは予想できる。

表1 国会議録にみる発話者別（上位8名）使用例数

発話者 仮名	発話時 身分	発話年	発話時 年代	文頭使用例数			
				なので	ですので	だから	ですから
MA1	参考人	06, 08	40代	24	0	17	0
MY2	公述人	09	30-40代	23	0	5	7
MK3	議員	07, 09, 10	40代	18	2	13	0
FS1	参考人	10	30代	13	5	0	0
FN2	参考人	10	不明	11	0	0	0
FI3	議員	10	40代	8	0	0	0
MF4	参考人・公述人	05, 06, 09	50代	7	0	25	18
FK4	議員	02, 03	40代	7	0	55	69

(発話者仮名のFは女性発話者、Mは男性発話者を表す。)

それぞれの発話者の発言件数および発話文数は異なるため、使用数の多寡を比較する意味はない。しかし、表1を見ると、原因・理由をあらわす他の接続表現（ここでは「ですので」「だから」「ですから」）との併用の程度に差が見られることがわかる。

男性発話者4名の発話には4語中複数の語の使用が見られたが、もっとも若いMY2は「なので」の使用が主であり、それに対して、MA1、MK3は「なので」と「だから」をおよそ3：2の割合で併用している。とくに、MK3は例(9)(10)に見られるように、発話全体の丁寧度に合わせて「なので」と「だから」を使い分けている様子がうかがわれる。

(9) 本当に松岡大臣は、大臣になられる前から議員外交、全国会議員の中でも最も有効な議員外交をずっと展開されてきたと、私自身大変尊敬をしているところであります。なので、国際関係については大臣みずからの口からぜひ聞かせていただきたいと思うところであります。

(MK3:2007年2月28日)

(10) 加えて、特定のプロジェクトに必要があるんだったら、そういう人を委員会ごとにきっちりと委員にしたらいいんです。顧問でずっと置いておく理由が私にはよくわからない。〔原文、改行〕だから、その辺は、今後裁量の余地のないように制度的にもそう見えるようにぜひ変えていく。顧問のあり方ということは考えることを一言いただきたいと思います。(MK3:2010年3月1日)

一方、8名の中でもっとも年齢の高い男性発話者MF4は、「だから」「ですから」を基調に「なので」が挟み込まれているが、明らかな丁寧度の差は見られない。

(11) もうこの三十年ほど、日本は自分の気持ち至上主義で来ちゃっていますから、今保護者で、大体小学校の高学年ぐらいまでの保護者がこの感じで、雑誌なんかにあおられて、自分探しをし、自分の気持ち至上主義でブランド追いをし、来た人たちが多いです。なので、ベテランの先生

たちが何を言うかというと、子供の向こうにいるのが親じゃないと、もう一人子供がいると言うんですね。だから、四十人の学級預かつたら八十人預からなきやならない。しかも、すごい重い、重い子供です。〔原文、改行〕なので、私はやっぱり義務と責任ということについてもきっちりすべきだと思いますし、それがもし上位の教育委員会がやるのであれば、そういうキャンペーンをきっちりやっぱりやらなきやならない。

(MF4:2006年12月7日)

次に女性発話者について見ると、FS1、FN2、FI3には「だから」の使用は見られなかった。女性発話者で「だから」との併用が見られたのはFK4の発話である。FK4は、使用例数から見ると「だから」「ですから」の使用が基本であり、「なので」の使用は限定されている。これはFK4の発言が2002年から2003年と、他の発話者の発言時と比較して早い時期に行なわれていることと関係しているかもしれない。

FI3の「なので」の使用例を見ると、「なので」使用文と前文の文末形式にかなり類似した傾向が見られる。以下の(12)に見るように、8例中7例の前文は「ーんです(ね)」で終わり、8例中6例の後文文末は「ーと思(って)います」である。

(12) こうしたことでも、今回この問題が出てきているのも、その記載がなければ、戸籍窓口では通常の一般の方のA I Dのお子さんと同じように出生届が受け入れられるんですね。なので、こここのところもひとつ検討の課題として御認識をいただければと思います。(FI3:2010年2月26日)

事実の叙述と意見あるいは比較的穏やかな要請をつなげる表現として「なので」が使用されている。一方、例(13)はFK4による発話であるが、前文末が「ですよ」と相手への働きかけが強まった結果、「だから」が選択されている。

(13) 記念する祝日というふうに強調されたんですけども、その前に、こぞって祝い、感謝する日とあるわけですよ。だから、昭和天皇という追号が残った唯一の昭和という日をつくるということは、昭和天皇に感謝

をするということが含まれるというふうに思うんです、一条を素直に読めば。（FK4:2003年7月16日）

5. おわりに

北原編（2004）で取り上げられている語や表現をみると、近年の「問題な日本語」を産み出す背景の一つに、丁寧さをいかに表示するかということがあるようだ。「おビールをお持ちしました」「こちら一になります」「よろしかったでしょうか」「コーヒーのほうをお持ちしました」など接客場面での模索が目立つが、「なので」もその一つの現れと言える。その一方で、「いたします」「ございます」「ですから」「ですので」などが丁寧すぎる表現として回避されてきている。

話すことばにおいて、接続助詞の「から」を用いた1文を2文にしようすれば、文頭の「だから」あるいは「ですから」の選択が可能であり、接続助詞「ので」を用いた1文を2文にしようとした場合、「ですので」に加えて、「だから」に相当する表現を補う形で「なので」が発生し、広く受容されつつあると言えよう。なお、「なので」の前文末に「んです」が多く見られることも「ですので」回避に影響をあたえているかもしれない。金澤（2008:99-100）では、近代以降の顕著な形式の変化として「ーマスガ」から「ーンデスケレド」への流れをあげているが、「んです」文の増加と文頭の接続表現選択の関係については今後の課題としたい。

以上、限られた観察の範囲内ではあるが、原因・理由を表す表現のバリエーションの使い分けについては、現状では個々の言語使用者によってさまざまな段階が見られるが、「なので」は、今後もおもに社会的な要因により、使用者および使用場面を拡散させていくことが予想される。

注

- (1) 栗原優（2007）は、新聞記事に見られる「なのに」の文頭使用を取り上げているが、「『なのに』だけではない。学生たちは同時に、『なので』という表現も『書き言葉』として文頭に用いる」（p. 41）と言及している。

(2) 「No 33. むかし「だから」、いま「なので」」(2005. 12. 07)

<http://hrclub.daijob.com/hrclub/?p=171> 2011年9月1日参照

(3) 「***英語学習現在進行形***」「文頭のなので：その後」(Mar 13, 2008)

<http://plaza.rakuten.co.jp/44904490/diary/200803130000/> 2011年9月1日参照

(4) YAHOO! 知恵袋 http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1156754126 2011年9月1日参照

(5) <http://www.nhk.or.jp/bunken/summary/kotoba/term/117.html> (筆者はメディア研究部・塩田雄大氏) 2011年9月1日参照

(6) <http://www.nhk.or.jp/kininaru-blog/87401.html> 2011年9月1日参照

(7) <http://www.tv-asahi.co.jp/announcer/> (にほんご学習帳>日本語研究室) 2011年9月1日参照

参考文献

金澤裕之 (2008)『留学生の日本語は、未来の日本語 日本語の変化のダイナミズム』ひつじ書房

北原保雄編 (2004)『問題な日本語—どこがおかしい？ 何がおかしい？』大修館書店 (「なので」の項目 : pp. 44-46は、矢澤真人氏執筆)

栗原 優 (2007)「新聞記事に見られる「書き言葉」と「話し言葉(口語)」の混同についての一考察」『文化情報学』第14巻第1号 pp. 39-43

現代日本語研究会編 (2011)『合本女性のことば・男性のことば(職場編)』ひつじ書房
(やべ ひろこ・東京学芸大学)